

特集論文

初年次教育におけるキャリアの位置づけと教育的対応をめぐって

渡邊 洋子 (新潟大学創生学部)

本稿は、キャリア創生研究会初回における標記のタイトルの報告内容について、関係文献にも言及しながらまとめ直したものである。筆者の現在の科研萌芽研究に至る研究経緯をたどった後、医師など「キャリア直結型学部」の初年次教育における実践経験を踏まえつつ、創生学部に顕著な「キャリア非直結型学部」におけるキャリアの位置づけと教育的対応を検討する研究構想を明示している。今回の学生主体キャリアイベントは現在の研究活動の柱の1つに位置づいており、この振り返りを踏まえた「次」の取り組みが、今後の課題となる。

キーワード： 初年次教育、キャリア、キャリア (非) 直結型学部、学生主体キャリアイベント

はじめに

2018年2月10日に新潟大学で開催された学生主体型キャリアイベント「女性と男性が、ともに人間らしく働くために」は、キャリア創生研究会における議論、および科学研究費・萌芽研究「初年次専門(職)教育と生涯キャリアデザインとの接合点の構築に関する実践開発的研究」(代表者:渡邊洋子)の問題提起から生み出された。本稿では、同研究会での報告内容をもとに、初年次教育におけるキャリアの位置づけと教育的対応に焦点化しながら、筆者の課題設定と論点などを示したい。

1 研究的背景

筆者の専門は生涯教育学である。修士論文は社会教育史で書き、『近代日本女子社会教育成立史—処女会の全国組織化と指導思想』(明石書店、1997)としてまとめた。博士課程在籍中、1990年に成人教育者研修(adult educator's training)調査を目的に、イギリスのNottingham大学に3か月滞在した。同国は19世紀の大学拡張運動など労働者の自己教育運動で知られ、サッチャー政権頃までは、欧米では成人教育の先進国と高く評価されていた。滞在中、「成人を教える教育学」の理論と実践の膨大な蓄積に触れ、帰国後に、成人学習/教育理論の成果を日本の生涯学習・社会教育の現場に活かしたいとの考えから、2002年に『生涯学習時代の成人教育学—学習者支援へのアドヴォカシー』(明石書店)を執筆した。また2005年に監訳書マルカム・ノールズ『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイド』(明石書店)を刊行した。

以後、2006年に日本医学教育学会研究大会の教育講演「成人教育学の基本原則—職業人教育への示唆と提起」の依頼を受けたのを機に、同学会の認定医学教育専門家制度の設計に関わる専門委員などとして関わるようになった。卒前・卒後の医学教育や薬学教育、看護学教育などの実践に関わってきた(奈良県立医科大学では2013-18年度の初年次授業(教養特別講義「自己主導型学習」)講師、聖マリアンナ大学、北里大学、奈良県立医科大学、北海道薬科大学、東京医科歯科大学、静岡県立大学、兵庫県立大学等でのFDワークショップ・FD講演会など)。

他方、2012年に著書『近代日本の女性専門職教育—東京女子医科大学創業者吉岡彌生の生涯教育学的研究』をまとめ、吉岡の働き方=生き方が、女性医師の生涯キャリアの展望に、現代的意義と示唆をもつことを見出した。筆者は以後、ロールモデルやメンターの存在にも注目した生涯キャリア研究(「日英の女性医療専門職の生涯キャリアと養成・支援に関する総合的研究」(H.25-27)「女性医療専門職における生涯継続教育の方法論開発—キャリアヒストリー法の構築と活用」(H.28-30))に科研代表者として、生涯キャリアと医学部入試と入学後の学習支援研究(「わが国の医学部における入学者選抜の妥当性と改善策に関する総合的国際共同研究」(H.28-31))に科研分担者として携わってきた。

2 初年次教育におけるキャリアと教育的対応への注目

以上のうち、授業「自己主導型学習」は2013年以降、奈良県立医科大学の要請を受け、医学部初年次教育の

一環として構築してきたもので、おおむね入学直後の4月・5月に計2コマ実施している。1コマ目は、双方向的な演習を交えつつ、学校教育で一般的な「教師主導型学習」と対照的な成人学習モデル「自己主導型学習」の考え方を知り、2つのモデルを使って、過去・現在・将来の自分の学びについて振り返り、考える授業で、基本的には「教師主導型学習 (Teacher-Directed Learning, TDL) から自己主導型学習 (Self-Directed Learning, SDL) への転換」の契機とすることを目的としている。2コマ目は、6年間のカリキュラムや学習機会を見通す作業 (事前課題) を踏まえ、「なりたい医師像とそのため求められる学び」を自ら設定する「学習契約」(前掲監訳書を参照) を作成するものである。この授業実践を重ねる中で、筆者は、医学生が今後の学びの方向性を自ら設定する作業と、教師 (他者) ではなく自分自身と結ぶ「学習契約」というツールが、「現在 (から)」の学びや取り組み姿勢と、医師としてのキャリアデザインおよびプロフェッショナルリズムとも協応するキャリア意識とを架橋する役割を果たす可能性もっている、との実感と示唆を見出した。

昨今の激烈な医学部入試の現状 (河本敏浩『医学部バブル—最高倍率30倍の裏側』、光文社新書、2017など) を見れば、入学直後の大多数の医学部生は、「受験勉強というゴールを制した覇者」といった達成感や安堵感から完全に自由とは言いがたい。他方、教養科目の受講が中心となる総合大学の医学部生とは異なり、大多数の医科大学では、入学直後からタイトな授業スケジュールの日々が始まる。膨大な学修内容への取り組みや実習等の始まりを前に、一人一人の医学生には切実に、TDL から SDL への円滑かつ効果的な転換が求められる。医学部での6年間の教育には、これらの学修を可能にする知力、長時間の膨大かつ過酷な学習や実習に耐えられる体力、そして職業的モチベーションを土台としてそれらを支える精神力の育成こそが、不可欠の前提となるのである。

その意味で、自己主導型学習や学習契約は、授業の範疇での学習技法 (technique) や心構えというよりは、むしろ、自己主導的な学習者の育成を目指す、教育/学習方法論 (strategy) でなければならない。目の前の学習への取り組みは、「医師になるために必要だから学ぶ」という認識から一歩踏み込む必要がある。すなわち、「医師一般」ではなく「どんな医師になりたいか」を考えることが、学びへの姿勢を転換する鍵となる。「なりたい医師になるためには、どんな内容をどのようなやり方でどこまで、学ぶ必要があるか」と考える

ことで初めて、「学び」が自己主導的な文脈に位置づくからである。

医師のみならず、卒業後のキャリアがある程度、一つないいくつかの方向に集約されていく、いわばキャリア直結型学部においては、「どんな職業人になりたいか」というキャリアへの視点を早期に獲得することが、自己主導的な学習者への早期の転換を促すものになると考えられる。それゆえ、キャリア直結学部の初年次教育においては、適切な形でキャリアデザインを含み込んだ取り組みを行うことが一定の効果を生むのではないかと、との大まかな仮説は成り立つ。では、学問領域を基盤として成立している学部でかつ、卒業後の進路やキャリアを特定しにくいキャリア非直結型学部では、初年次教育にキャリアデザインを含むことの意義と可能性を、どう考えたらよいただろうか。

以上のような問いが、冒頭の「萌芽研究」の構想の出発点となっている。

3 初年次教育とキャリアデザインの接合点 — 研究構想—

本研究の申請書に記した研究構想は、以下のようなものである。

四年制大学のうち、①特定の専門職養成に直結した「キャリア直結型学部」(医歯学部・看護学部等)、および、②進路を特定せずに関心分野で受け入れる「キャリア非直結型学部」(法学部・理学部等)の双方において、初年次の専門教育 (あるいは初修専門教育) と生涯を通じたキャリアデザインへの教育を効果的に接合するべく、その方途の模索に実践的に取り組み、そこに即応したプログラム開発を試みるものである。この構想は、現代の学部教育が①②のいずれにおいても、第一に中等教育までの教師主導型学習から高等教育に不可欠な自己主導型学習への転換、第二に生涯を通じた自らの働き方や職業観、専門職・職業人/個人としての生き方への展望などを含むキャリアデザイン、の両者において大きな弱点があるとの問題意識による。本研究では、従来の学士力などの議論を踏まえつつも、一部の医科大学での早期専門教育 early exposure の導入や教養教育の再構築、自己主導型学習の積極的活用などの先進的取り組みにも目配りしつつ、初年次の専門 (職) 教育と学生自身の生涯キャリアデザインに向けた展望の接合点を探り、そこへの広い意味での教育的対応のあり方を、授業その他の実践的な取り組みを通して研究開発することを目指すものである。

本研究は、次の点に特色があると考えている。(1)

大学の学部をキャリアと直結しているか否か（キャリア直結型学部・非直結型学部）で分類し、各々を専門職教育・専門教育と位置付けている点、(2) 中等教育（教師主導型学習）から高等教育（自己主導型学習）への学習スタイルの転換に注目している点、(3) 初年次教育と学生自身の当事者性にもとづくキャリアデザイン教育との接合点を重視し、そのあり方を模索するものである点、(4) 高等教育における学習スタイルの転換とキャリアデザインへの架橋を、大学での専門（職）教育の導入段階において実践的に結び付けようとしている点、(5) 一貫して実践開発研究を目指している点、である。

中等教育、高等教育、成人（生涯）教育と教育機関を基準に専門分化されている教育学研究では、高大接続の重要性は指摘されても、中等教育と成人教育の中間＝転換点に位置する高等教育機関における大学生の（成人）学習者としての特徴と課題の特殊性を明確に捉えることは難しい。またキャリアデザインやキャリア支援に関わる教育も、単なる進路・就職指導に留まる傾向にある。「キャリア直結型学部」と「非直結型学部」の双方において、学生が入学時から就職に至るプロセスで直面する課題の探究や、課題克服に求められる支援の可能性を丁寧に考察する研究は見られない。そこに、生涯教育学を基調とする本研究の挑戦的研究としての独自性と意義があると考えられる。

近年、アクティヴ・ラーニングや反転授業などが多大な注目を集め、教室の中で教師が期待する学びへのアクティブさが重視されるようになった。だが、そこには、学習者自身にとってその学びが長期的・生涯的視野においてどんな意味をもち、いかなるものとして機能するのか、学習者自身が自らの将来（キャリア）設計に向け、その学びをどう位置づけ方向づけるかを問う視点が十分とは言い難い。この成人教育／学習支援の観点こそが、挑戦的な意義を有するものと言えるだろう。

4 研究活動の現段階と今後の研究課題

2017年夏以降の取り組みとしては、①キャリア直結型学部の典型例として医学部に注目し、初年次専門（職）教育の実態に関するインターネット・文献での実態調査を実施した。②創生学部の複数領域の教員とともにキャリア創生研究会を組織し、メディア研究、会計学、経営学、心理学、社会科教育学など複数領域の有志教員とともに、専門教育とキャリア支援について領域ごとの実態と課題の共有を行っている。③実践研究のた

めの共通基盤構築の取り組みとして、有志学生を募って学生主体型キャリアイベントを企画・実施し、当日の記録とその多面的な振り返りを本ジャーナルの企画特集として取りまとめた。④奈良県立医科大学での授業「自己主導型学習」の実践的評価と課題に関わる論文を、同大教育開発センター藤本眞一教授との協働で同大紀要に投稿するべく準備中である。

今後の研究課題としては、医学部以外のキャリア直結学部、およびキャリア非直結学部の初年次専門（職）教育とキャリアデザイン／キャリア支援教育の実態・動向調査、国内外の学士・専門職教育改革の先進的（特徴的）取り組み例の吟味と実践的示唆の抽出、初年次教育・生涯キャリアデザインに関わる教育実践の省察的・批判的検討と新たなプログラム開発および試行である。

おわりに

2017年11月9日の第一回キャリア創生研究会では、本稿の内容をもとに課題提起の報告を行った。研究会ではそれを受け、生涯キャリアデザインの考え方やキャリアデザインとの違いへの質疑に始まり、キャリア結合型とキャリア非結合型の具体的相違、そこでのキャリアの定義づけ、初年次教育と生涯キャリアデザインの「接合点」についてなど、活発な議論が展開され、研究会メンバーの各々の分野におけるキャリア・キャリア教育の実態や課題などへのまなざしが共有された。そのような議論を踏まえて、学生主体キャリアイベントの実施・考察という実践研究を含む、いくつかの研究活動の方向性が出され、今日に至っている。

2016年秋の科研申請の段階では、本研究が萌芽研究に採択される可能性のみならず、採択後に、新たな職場の同僚の先生方とともに、このように有意義な実践研究に取り組めるなどとは、想像さえもできなかった。さらに、そこに創生学部1期生学生有志の協力を得られたことには、感慨深いものがある。ここに皆様への感謝の気持ちを示すとともに、さらなる研究の発展に向けて微力を尽くすとの意思を表明しつつ、改めてのご理解・ご協力をお願いする次第である。